

長野県の日向池におけるオオクチバスの駆除

片野 修（元増養殖研究所）

水産庁の外来魚事業のモデル水域として、長野県の上田市周辺の 3 か所の湖沼を選び、2007 年からオオクチバスの駆除に取り組んできた。このうち日向池は、水の透明度が低いうえに、ブルーギル、アメリカザリガニなどの餌が多く、また釣り人も多いために、もっとも駆除がむずかしい。

日向池では、当初は成魚を駆除したものの、繁殖抑制が十分ではなかったために、オオクチバスの個体数はかえって増加した。その後、主として卵駆除によって、産卵床の 9 割以上をつぶしたが、オオクチバスの個体数は減らなかった。その理由は、繁殖期の後期に深場に形成される産卵床を見逃してしまうためだと考えられる。そこで、成魚及び稚魚の捕獲に加えて、繁殖期が終わった 6～8 月に、湖岸の水草帯を一周して体長 2～4 cm の幼魚を網ですくいとる方法を行ったところ、オオクチバス成魚の個体数は減り、産卵も低いレベルで推移している。

2016 年に水産庁事業は終了し、私自身も研究所を定年退職した。そこで、駆除に要する労力を減らすために、産卵床駆除を止めて、浮上したての稚魚をたも網ですくいとる方法に重点を置くようにした。その結果、駆除にかかる労力は大幅に減り、産卵が初期に集中するようになった。稚魚のすべてを駆除することにはまだ成功していないが、水草帯で捕獲される稚魚の数も大幅に減りつつあり、オオクチバスの個体数は低密度に抑制されている。

稚魚を効率よく発見し捕獲できるのは、浮上してから一週間程度であり、とくに暖かい日中が適している。岸が急深になっているダム湖などでは、稚魚は捕獲しにくいので、人工産卵床を用いたり、幼魚の段階での駆除を考えたりする必要があるが、このような環境では、稚魚はオオクチバス成魚やブルーギルに捕食されやすいと推測される。

オオクチバスの適切な駆除法は対象とする水域によって大きく異なる。小規模な水域では、水を抜く方法がもっとも適当であるが、それができない場合には、繁殖抑制を中心に取り組むことが必要である。繁殖抑制では、卵駆除に重点が置かれる傾向があるが、実際には稚魚駆除の方が労力を削減し、効率よく抑制できる点で推奨される。



